年間4回施肥で『旨いお茶』をつくる

現地レポート
埼玉県入間市

貫井典扶さんはお茶を1．7町歩栽培されている生産者です。

施肥量も施肥回数も非常に多いことで知られるお茶を、年間たったの4回施肥で栽培されている、その秘訣についてお伺いしました。

サンアグロ
SUN AGRO CO., LTD

■秘訣は『状態を把握』すること

「お茶の栽培を始めて約１８年になります。ここ数年クワシロカイガラムシが多発していて、こまめに防除しているのですが、なかなか効果が上がらず苦労しています。」

日本三大銘茶の一つ「狭山茶」。貫井さんは、畑と茶樹の状態を把握しながら肥培管理をされています。

”色は静岡、香りは宇治よ、味は狭山でとどめさす”

「施肥量や施肥内容が本当に適切なのかと、以前から疑問に感じていました。また、お茶の旨みを数値化できないものかとも思っていました。土壌診断や成分分析をやるようになったのは、状態を数値化したいと思ったことがきっかけです。」

お茶は作物の中で施肥量・施肥回数ともに最も多い作物です。施肥量こそ規制値（年間チッソ施用量：反当５４ｋｇ）が設定されましたが、一般的な施肥回数は年間７～８回。

貫井さんは圃場および茶樹の状態を数値化し、その数値を基に試行錯誤した結果、今では年間たった４回の施肥で済ませられるようになりました。

生産者の敵「クワシロカイガラムシ」

■『足りない』ものと『足りている』もの

「土壌診断の結果、施肥した肥料が吸収されずに残っていることが分かりました。特にリン酸やカリは沢山残っていました。一方で、苦土や石灰は不足していることが分かり、苦土石灰等を入れて不足の解消に努めました。」

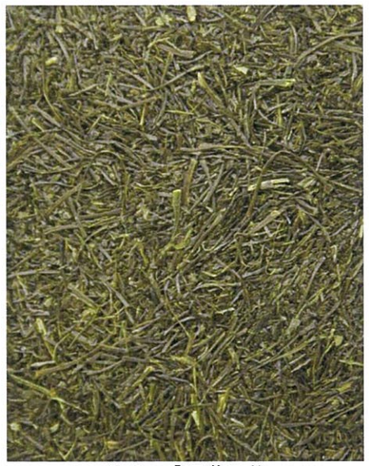
圃場の状態を数値化したことで、足りないものと、足りているものが把握できたわけです。

「今では苦土・石灰不足も解消されて、施肥量も以前と比べて大幅に削減することが出来ました。このことがコストダウンと省力化に直接つながっています。」

圃場の状態も改善され、コストダウンや省力化を実現し、まさに『一石二鳥』です。

春の訪れ「一番茶刈取り」

■適材適所で年間４回施肥を実現



狭山の「深蒸し茶」

肥料も施肥時期や茶樹の状態に合ったものを使っています。

「春肥には硫黄被覆尿素が配合された『ツバメコート』を使っています。それから５月の下旬にお礼肥として化成肥料。７月の夏肥には石灰チッソ入りの化成肥料を使い、８月下旬の秋肥には有機配合を使っています。春、夏、秋に使っている肥料は、それぞれの時期にゆっくり、しっかりと効いているように感じます。だから施肥回数を減らすことが出来たんです。」

施肥時期ごとに、気象条件や茶樹の状態が異なります。

貫井さんはそれぞれの施肥時期に合った肥料を使うことで、年間４回施肥を実現しました。

■収量よりも『旨いお茶』を

「春肥にツバメコートを使うことで４月の『芽出し肥』を省略することが出来ました。しかも、茶樹を深めに刈込んだ後の復活も早いように思います。」

適期に適材を使用することで茶樹の状態も良くなりました。

「収量を重視するよりも、やはり旨いお茶を作っていくということを一番目指しています。」

今、狭山茶は放射能汚染の影響で非常に厳しい状況に直面しています。

そんな中でも謙虚に、実直に栽培に取り組む貫井さん。これからも”旨いお茶”を全国の皆さんに届け続けてください。

■編集後記
静岡で生まれ育った私ですが、入社するまでお茶栽培のことなど何も知りませんでした。そんな私に、お茶栽培を一から教えてくださったのが、貫井さんをはじめとする入間市の皆さんです。
濃厚で渋みの効いた狭山のお茶は、まさに「味は狭山でとどめさす。」病み付きになります。是非一度ご賞味あれ。